

ナシマルカイガラムシ

○ 被害と発生生態

別名をサンホーゼカイガラムシともいい、雌成虫は直径約2mmの貝殻を持つ円形のカイガラムシである。雄の幼虫時は長円形であるが、成虫は羽化後に殻から脱出し飛翔する。カンキツ、ナシ、リンゴ、モモ、スモモ、ウメ、クリなど、多くの果樹の枝、葉、果実に寄生し加害する。果実に寄生した場合、果実の表面に黒褐色の微少な点のように付着し、外観が大きく損なわれ品質を低下させる。

年間3回発生し、幼虫の発生最盛期は第1世代が6月上旬頃、第2世代が7月下旬頃、第3世代が9月下旬頃となる。第3世代は樹幹や枝で幼虫態で越冬する。

幼虫は母介殻内でふ化し、介殻から離脱した後30～90分の間歩行して移動し定着する。1雌あたりの産卵数は数十卵であるが、多い場合は60～80卵を産むこともある。

10年生以上の結果樹に発生しやすく、未結果樹や50年生以上の老木にはほとんど見られない。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・ 整枝、剪定により薬剤のかかりやすい樹形となるよう努める。

(イ) 薬剤防除

- ・ 機械油乳剤の散布により、越冬幼虫の密度を低下させる。薬剤散布は、越冬部位である樹幹や枝に十分かかるように行う。
- ・ 防除適期は、6月上中旬（第1世代幼虫期）、8月上中旬（第2世代幼虫期）、越冬期であるが、幼虫の発生時期がそろそろ第1世代幼虫期を主体に薬剤散布を行う。



母介殻(右) と幼虫(左)



果実の外観被害